

強者の戦略

こんにちは、国語科の松崎です。今回は解説編です。まずは問題の確認から。

次の文章は、藤原道長が、娘彰子（しやうし）の入内を祝うため、屏風を作ったときのことを述べたものである。道長は、屏風を飾るための和歌を詠むよう、歌人たちに命じた。これを読んで、後の問いに答えなさい。なお、文章は一部改変したところがあります。

今は昔、*女院、内裏（うち）へはじめて入らせおはしましけるに、御屏風どもをせさせたまひて、歌よみどもによませさせたまひけるに、四月（うづき）、藤の花おもしろく咲きたりける*ひらを、*四条大納言、あたりて詠みたまひけるに、その日になりて、人々、歌ども持てまゐりたりけるに、大納言、遅くまゐりければ、御使して、遅きよしをたびたび仰せられつかはす。*権大納言（ごんのだいな）行成、御屏風たまはりて、書くべきよしなしたまひければ、いよいよ立ち居待たせたまふほどに、まゐりたまへれば、（a）「歌よみども、はかばかしき歌どももえ詠みいでぬにさりととも」と、誰も心にくがりけるに、御前にまゐりたまふや遅きと、殿の、「いかにぞ、あの歌は。遅し」とおほせられければ、（b）「さらにはかばかりつかまつらず。（c）悪くてたてまつりたらんは、まゐらせぬには劣りたることなり。歌よむともがらの、すぐれたらんなかに、はかばかしからぬ歌書かれたらむ、ながき名にさぶらふべし」とやうに、いみじく逃れ申したまへど、殿、（c）「あるべきことにもあらず。異人の歌なくともありなむ。御歌なくは、おほかた、*色紙形（しきしがた）を書くまじきことなり」など、（d）「まめやかに責め申させたまへば、大納言、「いみじくさぶらふわざかな。*こたみは、誰もえ詠みえぬたびにはべるめり。なかにも*永任（ながたふ）をこそ、さりとともと思ひたまひつるに、岸のやなぎといふことを詠みたれば、いと異様なることなりかし。（e）これらだにかく詠みそこなへば、公任はえ詠みはべらぬもことわりなれば、許したるべきなり」と、さまざまに逃れ申したまへど、殿、あやにくに責めさせたまへば、大納言、いみじく思ひわづらひて、懷より*陸奥紙（みちのけがみ）に書いてたてまつりたまへば、ひろげて前に置かせたまふに、*帥殿（そち）よりはじめて、そこらの上達部・殿上人、（f）心にくく思ひければ、「さりととも、この大納言は故なくは詠み給はじ」と思ひつつ、いつしか、帥殿、読みあげたまへば、

A むらさきの雲とぞみゆる藤の花いかなるやどのしるしなるらむと読みあげたまふを聞きてなむ、ほめののしりける。（g）大納言も、殿をはじめ、みな人いみじと思ふ気色を見たまひて、「今なむ、胸すこし落ちるはべりぬ」など申したまひける。

（『古本説話集』による）

*女院——藤原道長の娘であり、一条天皇の中宮となった上東門院彰子を指す。

*ひら——屏風の一面。

*四条大納言——藤原公任のこと。

*権大納言行成——藤原行成のこと。

*色紙形——屏風に、色紙のかたちを描いて彩色をし、それに歌を書いたもの。

*こたみ——このたび。

*永任——詠者の一人。

*陸奥紙——東北地方で作られた、こうぞ製の上質な紙。

*帥殿——藤原伊周のこと。

問一 傍線部(ア)(イ)(ウ)の語の意味を述べなさい。

問二 傍線部(a)(b)(c)を現代語訳しなさい。

問三 傍線部①②には、公任のどのような気持ちがあらわれているか、わかりやすく説明しなさい。

問四 Aの歌はどのような内容か、わかりやすく説明しなさい。

《解説》

解説の前に、今回の文章に登場する人物について少し確認をしておきましょう。

まず、藤原道長は説明するまでもありませんね。藤原氏の栄華を極めた人物です。その娘・彰子は紫式部の主人として有名な人物です。権力者・道長の娘の彰子の入内なので、お祝いも盛大に行われます。リード文にあるとおり、用意した屏風に和歌を書きつけたものを準備しようとしたようです。歌を詠むように命じられたメインキャラクター、四条大納言(藤原公任)は「三船の才」で有名な一流文化人。本文の途中にちらっと登場する権大納言行成(藤原行成)は三蹟(和書にすぐれた三人の能書家)の一人です。最高の和歌を、最高の文字で屏風に書き入れようとしたということからも、この入内に対する道長の気概が見て取れますね！

では、本文の読解です。

「今は昔、女院、内裏へはじめて入らせおはしましけるに、御屏風どもをせさせたまひて、歌よみどもによませさせたまひけるに、」

「今となつては昔のことだが、女院がはじめて内裏へお入りになられた時に、(殿は)屏風を準備なさつて、歌詠み達に(屏風に書き入れる)和歌を詠ませなさつたところ、」

古文の冒頭は、特にリード文との対応に気をつけて読むようにしていきましょう。リード文にあるフレーズを拾っていけば、ここは容易に読解できるでしょう。

「四月、藤の花おもしろく咲きたりけるひらを、四条大納言、あたりて詠みたまひけるに、」

「四月に藤の花が趣深く咲いている屏風の一面が四条大納言に当たつてお詠みになることになったが、」

状況をつかむためには、注釈にもしっかりと目を通すことが大切です。「ひら」というのは屏風の一面のことと注にありますから、藤の花が書いてある面が四条大納言の担当になったということです。

余談ではありますが、冒頭で確認したように、四条大納言というのは当時の一流文化人です。彼が担当することになったのが「藤」が描かれている面。きつと、これはくじ

強者の戦略

引きなどで決まった担当などではありません。「藤原」という名には、「藤」が含まれていますよね？『伊勢物語』にも言及がありますが、藤原氏と藤は重ね合わせてとらえられる存在でした。他のどの花でもなく、四条大納言が担当したのが「藤」の面であること。道長の四条大納言に対する期待の高さがうかがえます。

「その日になりて、人々、歌ども持てまゐりたりけるに、大納言、遅くまゐりければ、御使して、遅きよしをたびたび仰せられつかはす。」

「その当日になって、人々は歌をもつて参上したが、四条大納言が遅く参上したので、（殿は）お使いを遣つて参上が遅い旨を何度も仰る。」

「その日」が何の日を指すのか、この本文だけで明言するのは難しいですが、人々が歌を持つて参上したということですから、道長に歌を依頼されていた人達の「締め切り日」のようなものだったのではないかと考えてもらえれば良いでしょう。

そんな日なのに、「藤」の面を任された（四条）大納言は、道長のもとになかなか参上しません。道長はそわそわしたのか、お使いの者を何度も四条大納言の邸へ派遣しました。

「権大納言行成、御屏風たまはりて、書くべきよしなしたまひければ、いよいよ立ち居待たせたまふほどに、まゐりたまへれば、」

「権大納言行成は御屏風をちようだいして、歌を書き入れることができる旨を申し上げなさったので、（殿は）いよいよ立ったり座ったりして待つていらつしやるうちに、（四条大納言が）参上なさったので、」

新キャラクター、行成の登場です。ここで「？」となった人もいるかもしれませんね。行成さん、何してるの？自分で作った和歌を書き込もうとしてるの？って。

行成は三蹟の一人ですから、和歌を「書く」役割の人だと捉えておいて下さいね。

文法としては、「たまはる」は謙譲の本動詞「いたたく、ちようだいする」。主体を補う箇所としては、「いよいよ立ち居待たせたまふ」については、二重尊敬を見つけ、権力者・道長（殿）が補えれば良いでしょう。また、「まゐりたまへれば」の主体は、“すでに名前は出てきているけど、この場にいない人物”である四条大納言だと補いましょう。

「（。）『歌よみども、はかばかしき歌どももえ詠みいでぬにさりと』と、誰も心にくがけるに、」

傍線部の解釈問題です。会話文の問題は、「誰の発言（心中文）か」「どのような状況での発言（心中）か」を確実に押さえておきましょう。今回は、「〜と誰も」とありますから、その場に居合わせた多くの人の思いだと判断しましょう。ちなみに、「心にくがる」は、形容詞「心にくし」（＝心ひかれる）の動詞形です。

四条大納言の参上に際し、多くの人が彼に心ひかれたようです。傍線部内にある単語、文法を確認すると、以下の三点がポイントとなるでしょう。

○「はかばかし」——しっかりしている

○「えゝ打消」——出来ない（不可能）

○「さりとも」——いくらそうだといっても、それにしても

一番のポイントは「さりとも」の解釈でしょう。「さりとも」は、前文の内容を受けて(往々にして、好ましくないことが書いてあります)、それを認めつつも、それとは違う事態を望むことを表す際に使用します。

「さりとも」の直前までの解釈は、「歌詠みたちが、しっかりとした歌を詠み出すことが出来ないが、」となります。欲を言う、と、「しっかりとした歌」って表現はめったに使用しませんから、「しっかりとした情景描写」「しっかりとした文字配置」「しっかりとした修辞技法」等に当てはめて考えて、「出来の良い歌」くらいに解釈しておくほうが綺麗な解釈となります。

さて、道長から和歌を所望された歌人達は、あまり良い歌が詠めなかったようです。これが、「さりとも」の指示内容の部分。好ましくないことが書いてありますよね？では、それとは違う事態って何でしょう？「出来の良い歌を詠むこと」ですよね。

ここで、人々が四条大納言に対して心ひかれていたことを踏まえると、「みんなはうまく詠めなかったけれど、それにしても四条大納言だけは出来の良い歌を詠むだろう」と期待しているんですね。それを踏まえると、ここの解釈はこうになります。

『歌詠みたちが、しっかりとした出来の良い歌を詠み出すことが出来ずにいるが、そうはいっても四条大納言は出来の良い歌を詠むだろう』と、誰も(四条大納言がどのような歌を詠むのか)心惹かれていたところ、

「御前にまゐりたまふや遅きと、殿の、『いかにぞ、あの歌は。遅し』とおほせられければ、『さらにはかばかしつかまつらず。』^(b)悪くてたてまつりたらんは、まゐらせぬには劣りたることなり。歌よむともがらの、すぐれたらんなかに、はかばかしからぬ

歌書かれたらむ、ながき名にさぶらふべし』とやうに、いみじく逃れ申したまへど、

「くや遅き」は、「くするやいなや」という意味を示します。四条大納言が、道長の前に参上するやいなや、道長は歌のことを切り出します。

それに対する四条大納言の返答は、「さらにはかばかしつかまつらず。」傍線部(ア)「さらに」は基本語句ですね。打消しの語を伴って、「まったく(ない)」と解釈します。ですので、「まったく出来の良い歌は詠めていない。」というお返事です。

傍線部(b)「悪くてたてまつりたらんは、まゐらせぬには劣りたることなり」も解釈していきましょう。

○「たてまつる」——謙譲の本動詞「差し上げる、献上する」

○「たらんは」——完了の助動詞「たり」＋仮定の助動詞「む」＋係助詞「は」

○「まゐらす」——謙譲の本動詞「差し上げる、献上する」

助動詞「む」が仮定となること、また「まゐらす」——単語で謙譲の本動詞だと解釈できていることがポイントとなります。(「まゐる」＋助動詞「す」という単語の切り方もありますが、それだと文脈に合致しくありません)

ということ、傍線部(b)は、「歌を出来の悪い状態で献上するとしたらそれは、献上しないのに劣ることである」となります。

続きもさっと確認しましょう。「歌よむともがらの、すぐれたらんなかに、はかば

強者の戦略

かしからぬ歌書かれたらむ、ながき名にさぶらふべし」については、「ともがら」は「同輩」や「仲間」、「すぐれたらんなかに、はかばかしからぬ歌書かれたらむ」は「同輩の歌人達の優れている歌のなかに、自分の出来の良くない歌が書かれたとしたら」ですね。「ながき名」は、「ながき」と「名」に分けて考えましょう。「名」は、名前の他に、「うわさ、評判」といった意味があります。良い意味にも、悪い意味にも使用されますが、今回は、上手な人の歌の中に、下手な自分の歌が混ざると「四条大納言つて実は歌が下手なんだよ！」つて悪い噂が流れそうなのは容易に想像が付きましますから、悪い意味で使用された「名」です。長らく悪い噂が流れる事をいやがって、四条大納言は歌を詠みたくないと言い逃れをしています。

「殿、^(イ)あるべきことにもあらず。異人の歌なくともありなむ。御歌なくは、おほかた、^{*}色紙形を書くまじきことなり」など、^(イ)まめやかに責め申させたまへば、

歌を詠みたくないという四条大納言に対して、道長が言い返します。「あるべきことにもあらず」は、「そんな状態、あつてはならない」と禁止や不可能を示す表現ですが、今回は歌を詠むかどうかの話ですから、「禁止」で良いでしょう。また、「ありなむ」は、ラ変「あり」＋強意の助動詞「ぬ」＋推量の助動詞「む」。直訳すれば、「きつとあるだろう」になるのですが、助動詞「む」の意味用法次第で「きつとくしよう」「くであつてもよいだろう」というように訳出に幅が生まれます。今回は、「違う人の歌は無くても^も□□」に当てはまる言葉ですから、「違う人の歌は無くても良いだろう」が適切でしょう。

歌を詠みたくない四条大納言。それに対して、他の人はともかく、四条大納言の歌は無いと困ると言い張る道長の対比ですね。

傍線部(イ)の「まめやかに」(形容動詞「まめやかなり」)は「真面目に」「本格的に」という意味がありますが、今回は「責め」という語に接続していますから、「真面目に、真剣に」くらいの解釈が良いでしょう。現代語訳を確認すると、以下の通りです。

「殿は、『あなたが歌を詠まないなんて、あつてはならないことだ。別の人の歌は無くても良いだろう。あなたの御歌がないならば、まったく、色紙形を書くわけにはいかないのだ』などと、真剣に責め立て申し上げなされたので、」

「大納言、『いみじくさぶらふわざかな。こたみは、誰もえ詠みえぬたびにはべるめり。なかにも永任をこそ、さりとと思ひたまひつるに、岸のやなぎといふことを詠みたれば、いと異様なることなりかし。』^①これらだにかく詠みそこなへば、公任はえ詠みはべらぬもことわりなれば、許したぶべきなり」と、さまざまに逃れ申したまへど、」

四条大納言はなおも引き下がりません。永任という人物を引き合いに出して道長に説得を試みます。

「こたみは、誰もえ詠みえぬたびにははべるめり」は、「こたみ」に注目しましょう。

「今回は、誰も詠むことが出来ない折であるようです」。「今回」というのは、道長に依頼され、彰子の入内の祝いの屏風に歌を詠む一連の場面ですよ。権力者の娘への祝い、

強者の戦略

プレッシャーがかからないわけありません。今回は、誰もが緊張して歌をうまく詠むことが出来ない機会であるというわけです。

さらに、そんななかでも、「永任をこそ、さりとも」と、四条大納言は思っていたようです。「さりとも」は、今回既出ですからもう大丈夫ですね？「みんな歌がうまく詠めない、そうはいつでも、永任ならうまく歌が詠めるだろう」と四条大納言は思っていました。永任さんは、四条大納言からの評価が高い人物だと言えそうです。

そして、その永任さんは「岸のやなぎ」という内容の和歌を詠み、それが「異様（変わった）っている様子」と捉えられているようです。いつもと違う詠みぶりが、良いことなのか悪いことなのかは、傍線部を見れば明らかです。「これらだにかく詠みそこなへば」とあり、永任は「詠み損なつた」と言われています。誰もうまく歌が詠めず、「この人なら…」と思われた永任さんも失敗。そんな状態だから、「公任はえ詠みはべらぬもことわりなれば、許したぶべきなり」Ⅱ「公任（四条大納言）が歌を詠むことができないのも道理の内だから、歌を詠めないことを許しなさるべき」ということですね。

「殿、あやにくに責めさせたまへば、大納言、いみじく思ひわづらひて、懷より陸奥紙に書いてたてまつりたまへば、ひろげて前に置かせたまふに、」

「殿は厳しく責め立てなされたので、四条大納言はとても思い悩んで、懷から陸奥紙（を）取り出し、それ（に）和歌を書いて献上なされたので、広げて前に置きなされたところ、」説得を試みますが、それでも道長は諦めません。とうとう大納言は諦めたのか、懷から紙を取り出して、和歌を書き、道長に献上します。道長はその紙を広げて前に広げました。

「帥殿よりはじめて、そこらの上達部・殿上人、心にくく思ひければ、『さりとも、この大納言は故なくは詠み給はじ』と思ひつつ、いつしか、帥殿、読みあげたまへば、」
「帥殿をはじめ、多くの上達部、殿上人が心（こころ）がひかれたので、『詠むことが出来ないと言っていたからといって、この四条大納言は趣の無い歌は詠みなさないだろう』と思ひながら、さつそく帥殿が読み上げなされたところ、」

「心にくし」は今回既出です。辞書の意味をそのまま答えられるかと思えます。また、古文単語「故」は「理由」という意味の他に、「由緒」「趣」という意味があります。またまた「さりとも」と言う語が使用されていますから、歌を詠むことが出来ない（と断り続けた）四条大納言の行動を指しながらも、「そうはいつでも、四条大納言なら上手に詠んでいるはずだ」と期待しながら人々が歌をのぞき込みました。

「A むらさきの雲とぞみゆる藤の花いかなるやどのしるしなるらむ」

和歌の解釈問題です。大切なのは、この和歌が詠まれた状況を踏まえると言うこと。

この歌は、

○彰子の入内を祝う歌

○藤原道長に依頼された作った歌

○藤の花の屏風に書くための歌

であることを踏まえておく必要がありますね。

単語としては、「やど」「しるし」を押さえておきましょう。

「やど」は、現代の感覚で旅宿と捉えてしまうと、彰子が旅をすることになってしまふので文意に沿いませんね。人が宿る場所、ということで「やど」には「家」という意味があります。

「しるし」は「目印」という意味もありますが、古文読解で大切なのは「前兆」や「効き目、靈驗」の意味です。全体を直訳すると、

「紫の雲と見える藤の花は、どのような家の前兆なのであろうか」。

ここでひとつ、古文知識が必要となります。「紫の雲」というのは、仏様が来迎する際に乗っている雲のこと。仏教説話などで読んだことありますか？ 仏様が乗っている雲なのですから、「紫雲」Ⅱ「めでたい雲」なんです。紫色の藤の花が、紫の雲かと思えるくらいたくさん咲いている。紫雲というのはめでたい雲だから、これからどんなめでたいことが起こるんだろう？ ということを詠んでいるんです。それを踏まえると、さきほど「前兆」と訳出した「しるし」は、もう少し意味を限定して、「良いことの前兆」Ⅱ「吉兆」と捉えると、文意がもっと明快になります。

めでたい雲である紫雲のような藤が咲き誇っているが、それはどの家にどんなめでたいことが起こる前兆なのか、という意味です。

もちろん、藤の花が咲き誇っている家とは藤原氏のこと。藤原氏にどんな良いことが起きるのかというと、彰子の入内による繁栄ですよ。

四条大納言は、藤原氏が非常に気分を良くするような歌を詠み上げました。

「と読みあげたまふを聞きてなむ、ほめののしりける。」^②大納言も、殿をはじめ、みんないみじと思ふ気色を見たまひて、『今なむ、胸すこし落ちぬはべりぬ』など申したまひける。」

帥殿がこの和歌をみんなに向かって詠み上げ、人々は大声で褒め称えます。状況にも合致しますし、何より藤原氏を称える歌を非難出来ませんしね。

四条大納言自身も、道長や皆が彼の歌を「いみじ」と思っている様子を見て、「胸すこし落ちはべりぬ」となりました。まず、「いみじ」は肯定的な意味と否定的な意味があります。皆が歌を褒めている場面なので、ここでは肯定的な「いみじ」ですね。「素晴らしい」くらいで良いでしょうか。では、「胸が落ちる」ってどういうことでしょうか？ 暗記必須の語ではありません。文脈で判断する必要があります。こういときは、まず文脈から、プラスイメージかマイナスイメージかなど、訳出の方向性を考えます。そして、現代語の似た表現を当てはめていきます。今回は、皆が歌を褒め（プラスイメージ）、大納言も、とあるのですからプラスイメージの語でしょうね。では、プラスイメージの「胸が落ちる」って何でしょう？ 「胸が落ち着く」くらいが妥当でしょうか。（ここは人によって差がある部分でしょう）

下手な歌は詠めないなあと思っていた四条大納言が、いざ自分が詠んだ歌を皆が褒めているのを見て、ほっとしているというシーンだと考えられます。

強者の戦略

《解答》

問一 (ア) まったく (イ) 真剣に (ウ) 心ひかれて

問二 (a) 歌詠みたちが、しっかりとした出来の良い歌を詠み出すことが出来ずにいるが、そうはいっても四条大納言は出来の良い歌を詠むだろう

(b) 和歌を出来の悪い状態で献上するとしたらそれは、献上しないのに劣ることである。

(c) あなたが歌を詠まないなんて、あつてはならないことだ。別の人の歌は無くても良いだろう。

問三 ① 永任のようなすぐれた歌人でさえ、今回の歌をうまく詠むことが出来ていないので、自分が歌を詠めないのは道理であり、歌が詠めなくても許して欲しいという気持ち。

② 道長に責め立てられて詠んだ歌を、道長をはじめとして居合わせた人皆が大声で褒めたので、義務を果たしたとほっと安心する気持ち。

問四 屏風に描かれた藤の花を紫雲に見立てて、どこの家の吉兆だろうかと思ふことで、入内する彰子とこれからの藤原氏の繁栄を祝うという内容。

《現代語訳》

今となつては昔のことだが、女院がはじめて内裏へお入りになられた時に、(殿は)屏風を準備なさつて、歌詠み達に(屏風に書き入れる)和歌を詠ませなさつたところ、四月に藤の花が趣深く咲いている屏風の一面が四条大納言に当たつてお詠みになることになったが、その当日になつて、人々は歌をもつて参上したが、四条大納言が遅く参上したので、(殿は)お使いを遣つて参上が遅い旨を何度も仰る。権大納言行成は御屏風をちようだいして、歌を書き入れることができる旨を申し上げなさつたので、(殿は)いよいよ立ったり座つたりして待つていらつしやるうちに、(四条大納言が)参上なさつたので、「歌詠みたちが、しっかりとした良い歌が読み出すことが出来ずにいるが、そうはいっても四条大納言はそんなことはないだろう」と、誰も(四条大納言が)どのような歌を詠むのか(心惹かれていたところ、御前に参上なさるやいなや、殿は「どのようになつた、あの歌は。遅いぞ」とおつしやつたので、(四条大納言は)「まったくしっかりと詠み申していません。出来の悪い状態で献上するのならそれは、献上しないのに劣ることである。同輩の歌人たちの、すぐれた歌の中に、しっかりとしない歌を書かれたならば、汚名を長く残すことになるでしょう」というように、たいへん言い逃れをし申し上げなさつたが、殿は、「あなたが歌を詠まないなんて、あつてはならないことだ。別の人の歌は無くても良いだろう。あなたの御歌がないならば、まったく、色紙形を書くわけにはいかないのだ」などと、真剣に責め立て申し上げなさつたので、四条大納言は、「大変困つたことだなあ。今回は、誰もが詠むことが出来ない(緊張する)機会であるようです。中でも、永任こそは、そうはいっても優れた歌を詠むだろうと思ひ申し上げて居ましたが、『岸の柳』ということ詠んだので、とてもおかしなことだよ。永任らでさえ、

強者の戦略

このように詠み損じていますので、公任は詠むことができないのも道理であるので、お許しになるべきです」と、さまざまに言い逃れをし申し上げなされたが、殿は厳しく責め立てなされたので、四条大納言はとても思い悩んで、懷から陸奥紙（を取り出し、それ）に和歌を書いて献上なされたので、広げて前に置きなされたところ、帥殿をはじめ、おおくの上達部、殿上人が心がひかれると思ったので、「詠むことが出来ないと言っていたからといって、この四条大納言は趣の無い歌は詠みなさらないだろう」と思いながら、さっそく帥殿が読み上げなされたところ、

紫の雲と見える（ほど咲き誇っている）藤の花は、どの家の吉兆なのであろうかと読み上げなされるのを聞いて、（皆が）大声で褒め称えた。四条大納言も、殿をはじめとして、居合わせた人皆が公任の歌を素晴らしいと思っている様子を見なされて、「今になつてようやく、心が少し落ち着きました」などと申しなされた。